

JAIR NEWSLETTER

日本国際政治学会

No. 24

July 1983

フランスの「平和研究」その後

高柳先男（中央大学）

3年ほどまえわたしは、『「戦争学」から「平和研究」へ』と題する小文を書いた（日本平和学会編『平和研究』第5号）。フランスの場合、IPRA型「平和研究」は根づかず、長いことブートゥールの「戦争学研究所」（IFP）の「戦争学」（Polémologie）が主流であったこと、しかし78年IFPは財政的困難に見舞われて、機関誌『戦争学研究』の休刊を余儀なくされたこと、それにかわって79年にIPRAに加盟することになる「フランス平和学会」（ARESPA）が誕生し、フランスの「平和研究」の潮流が大きく変わりそうなことを紹介したものであった。その後、フランスの「平和研究」はどうなっただろうか。

まずIFPだが、78年12月発刊の23号で正式に機関誌の休刊を表明したあと、研究所の活動は『戦争と文明』（80年）を刊行したものの、事実上停止状態にあった。そして、2年半後の81年6月、24号が出されたが、これはブートゥール追悼号で、特別のものであった。ちょうどその頃、わたしはアンバリッド廃兵院の一室に移転した研究所を訪ねる機会をもった。新たに所長に就任したボコ氏自身、週2日出勤のパートタイマーで、事務も含め専任スタッフはおらず、その凋落ぶりには正直驚かされた。ソルボンヌのある教授はわたしに、フランス「戦争学」の死と表現したほどである。

もっとも80年すでに、フランス国防研究財団にその1機関として吸収されていたのだから、制度的にもIFPは一度死んだのだといえよう。だから昨年より、この財団の財政的援助のもとで、紛争の基礎研究、戦略-平和-軍縮論の研究、テロリズムの研究を柱とする研究活動が再開され、機関誌も復刊された。今年、新たに刊行されることになったニューズレター（Études Polémologiques, le bulletin, n°2）の巻頭言は、「IFPはどこへ行く？」であり、再開された研究活動の日程と計画とが述べられているが、その前途はやはり厳しい。

一方、ARESPAはどうなっただろうか。これは第1に「平和と紛争の研究」の大枠のなかで経済、社会、政治、文化、法律、軍事、科学、国際関係上の諸問題を研究しているものを結集し、第2に国際的な軍縮、社会の非軍事化、社会、経済的發展のために活動し、またあらゆる形態の支配、抑圧、搾取に反対している諸勢力に対して有用かつ具体的な情報と分析とを適切な手段を通して提供することを目的としている。80年4月、第1回研究大会を、「ヨーロッパ、危機、戦争」を主題に100人ほどの参加者を得て開き、成果として『明日は戦争が』（81年）が刊行された。

81年末、ARESPAを事実上主導しているジョクス教授をバリ社会科学高等研究院に訪ねたとき、いづこも同じで、財政難による研究活動の支障と研究者一般の無関心ぶりにつき自嘲気味に語っていた。ミッテラン政権がかれらに好意的であること、それ故ならんかの予算措置が期待できそうなことだけが救いだとも話していた。こうして昨年「平和研究と戦略学のための学際センター」（CIPRES）が創設されたのである。これは、戦略的同盟（NATO、WTO）の評価、限定-永久戦争と紛争（中東、南ア、中米）、安全-軍縮-開発、核-非核抑止の4つを当面の研究課題としている。まだ具体的な成果はないが、ARESPAとの共同で、今年1月より『平和と紛争』（Paix & Conflits）（12ページの小冊子）を発刊するまでになった。

IPRA型の平和研究の制度化が軌道にのったというべきであろうが、研究者の層の薄さは否定できず、その前途は同様に厳しいといわなくてはならない。

1983年秋季研究大会のお知らせ
日時：10月22日（土）、10月23日（日）
会場：宮崎大学
共通テーマ：戦後日本外交の歴史とその検討

学会活動報告

(1983年3月～5月)

- 3月8日 『戦後日本の国際政治学』英文版(麻田貞雄
会員編)の原稿完成、文部省へ提出
- 3月23日 私学会館において会計監査
- 5月7日 成蹊大学において事務局会議
- 5月20日 私学会館において運営委員会・理事会開催
- 5月21日～22日 春季研究大会開催(於上智大学)大
会出席者336名 懇親会出席者156名
- 5月21日 書評小委員会開催(於上智大学)
- 5月22日 編集委員会・運営委員会開催(於上智大学)
- 5月25日 機関誌『国際政治』第73号(昭和58年度第
1号)「中東：1970年代の政治変動」発行

学会財政の現況について

大畑 篤四郎 (早稲田大学)

このたび学会の会計主任をつとめることになった。すぐれた会計主任であった宇野氏の後任をつとめることができるかどうか、不安を覚えているが、会員諸氏の今後の御協力を賜りたいと思っている。

さて学会財政はきわめて困難な状況にある。昭和57年度の決算では予算の12,569,123円に対し、実際収入は11,186,578円にとどまっている。特に機関誌収入が激減していることなどによるが、そのため繰越金は前年度の1,222,123円に対し、57年度の決算では520,360円に減少した。昭和58年度の予算規模は11,607,360円と57年度予算よりも減額されているが、それでも機関誌収入は57年度予算なみを想定している。寄附金を頂いている企業で退会を申し出ているところもあり、不況と行革の時代を考えれば収入の伸びは今後は期待できない。機関誌の売上げの伸びを期待しているが、会計を預る者としては緊縮財政を推進したい。しかしそれによって学会活動が萎縮するようなことは避けたいので、その点の処理が会計主任としての課題でもありと考えている。

編集委員会だより

平井 友義 (大阪市立大学)

1 機関誌『国際政治』第73号「中東：1970年代の政治変動」(編集責任：丸山直起)は、予定通り5月末に刊行することができました。第74号以降の刊行予定は次の通りです。

号	特集題名(仮題)	編集担当	刊行予定
74	国際政治の理論と実証	山本吉寛	83年8月
75	日本外交の非正式接触者	西原 正	83年10月
76	国際組織と体制変化*	緒方貞子	84年2月
77	国際統合の研究	鴨 武彦	84年8月
78	東アジアの新しい国際環境	中嶋嶺雄	84年10月
79	日本外交史研究	原口邦紘	85年5月
80	軍拡の世界構造	木村修三	85年8月
81	ソ連圏諸国の内政と外交	伊東孝之	85年10月

*第76号は、都合により刊行が早まる予定です。

86年度刊行分(第82号以降)は、猪口孝、岡部達味、山本武彦の各編集委員が担当の予定です。(以上敬称略)

2 機関誌に執筆される場合は、執筆要領(原稿依頼状と共に配布)を厳守して下さいようお願い致します。

3 (訂正) 機関誌第73号の英文執筆者リスト中、西尾林太郎会員の現職を大学院生と記載してありますが、これは編集副主任のミスで、正しくは早稲田大学社会科学研究所研究員です。お詫びと共に訂正させていただきます。副主任(石川)記。

◇機関誌第78号『東アジアの新しい国際環境』(仮題)の原稿募集について

本特集の目的は、中国の非毛沢東化に伴う世界戦略の転換によって、米中関係、中ソ関係といった国際政治の基本的枠組が70年代初頭と大きく異なりつつある今日、東アジアの国際環境にはどのような新しい課題が生じつつあるかを分析するところにある。その際、国際関係論と地域研究の二つの座標軸のなかで問題点を内在的に把握することにつとめたいと考えている。

具体的には、「中国の政治・社会的変動」、「朝鮮半島の新しい課題」、「インドシナ半島の新しい課題」、「中ソ関係の展望」、「米中関係の現状と将来」、「香港・台湾の将来」といったテーマをとりあげたい。

なお、今回は原則として、東アジア分科会のこれまで10回に及ぶ研究会の成果を機関誌に反映させたいと考えているが、応募原稿のうちからも1,2編を掲載させていただきたいので、執筆希望者は、論題と簡単な要旨を1983年9月末までに提出されたい。

原稿の締切は1984年5月末の予定で、枚数は400字詰50枚程度(注を含む)。

問い合わせ等は下記にご連絡ください。

編集責任者：中嶋 嶺 雄

研究分科会の近況

東アジア分科会

中嶋 嶺 雄 (東京外国語大学)

東アジア分科会は、昨年82年10月に成蹊大学で開かれた秋季研究大会日に、第九回の定例研究会を開きました。今回は、時間との兼ねあいもあって、報告は一つとなりましたが、テーマが1997年に英国から中国に返還をせまられている香港の問題とあって、30人近くの多数の参加者を得て活発な質疑応答が行なわれました。第九回分科会報告内容は以下の通りです。

報告者 伊原吉之助 (帝塚山大学)

テーマ 「香港の現状と将来」

なお、伊原会員は、81年から1年間、外務省の特別研究員として、香港におられましたので、現地での体験をもとに、香港の将来にかんしてユニークな御報告をいただくことができました。

ソ連・東欧分科会

林 忠 行 (一橋大学)

ソ連東欧分科会の事務連絡は当分のあいだ当方でおこないます。分科会運営上のご提案、報告のご希望等は、下記までお寄せ下さい。

東南アジア分科会

西原 正 (防衛大学校)
小 沼 新 (宮崎大学)

東南アジア分科会(会員約30人)は上智大学での春季大会の第1日目の5月21日、東南アジア史その他の分野で着実な研究をすすめておられる明石陽至会員(南山大学)に「ポンティアナク事件について」と題する報告をお願いし、11人が出席しての充実した会合となりました。これは、1943-44年日本海軍軍政下にあったボルネオ島ポンティアナク市で現地人による日本人暗殺計画が発覚したとして、海軍が大量の現地人を処刑したとされる事件をさしますが、事件の真相や、陸軍と海軍との見解の相違、海軍内部の見解の相違、資料の問題、などに関して活発な質疑応答がなされました。戦時中ジャワの軍政にたずさわった斎藤鎮男会員(青山学院大、

元大使)からも貴重なコメントをいただきました。今回は、地域の歴史に関するテーマを選びましたので、秋季大会は現代のテーマ(地域政治、地域国際関係など)で分科会を開催する予定です。どうぞお楽しみに。

アフリカ・中近東分科会

浦野 起 央 (日本大学)

中東の激動と国家枠組の変容に焦点を当てて、研究会を開いています。

7月1日(金) 牟田口義郎「シオニズムの変容とアラブ主義——『対話』の試み」

9月16日(金) 鈴木 董「中東の『近代』と『国民国家』の問題」

場所は千代田区三崎町日大法学部2号館2階研究所会議室で、時間は午後6時30分より9時30分までです。研究会のご連絡は、浦野起央もしくは下田信(TEL

アフリカ分科会

小 田 英 郎 (慶応義塾大学)

このたびアフリカ・中近東分科会が二分され、新たにアフリカ分科会が発足することになりました。定例研究会の開催などによって活動を盛んなものになりたいと考えておりますが、取敢ず参加者リストを作成しますので、御関心をお持ちの方は下記宛御連絡下さい。

小E

安全保障分科会

佐藤 栄 一 (新島女子短期大学)

下記のように分科会を開きますのでぜひご参加下さい。なお分科会運営のため名簿を作成したいと思いますので、分科会参加ご希望の方は今回の会合へのご出欠と合わせて、佐藤

報告者：岩島久夫会員(防衛庁防衛研修所第1戦史研究室長)

「最近の国際軍事情勢をどう見るか——その構造的把握」

日 時：1983年7月29日(金)午後6時～8時

場 所：日本国際問題研究所会議室
(港区虎ノ門1-2-20 第19森ビル6階)

国際交流分科会

杉 山 恭 (青山学院大学)

国際交流分科会は、本年1月以降次のような研究会を開催しました。

- 1月19日 岡崎久彦「外交政策と大学および研究機関の役割」
- 2月23日 七田基弘「国際交流研究の課題」
- 3月23日 斉藤鎮男「国際コミュニケーションの新しい動向と日本の対応策」
- 4月23日 荻田吉夫「わが国の広報・文化活動の現状」
- 5月21日 平野健一郎、花井等、内田孟男「国際交流研究のあり方」

本研究会に参加御希望の方は、下記に御連絡下さい。

名古屋国際政治史研究会

福 田 茂 夫 (名古屋大学)

昨年度の当研究会の発表内容は以下の通りです。(なお毎回の報告要旨を月一回発行の「びじょん」に掲載)

- 第28回 1982年6月16日 アメリカのポスト・ベトナム外交論における2つの立場(小川敏子、名大大学院)
- 第29回 7月7日 フォークランド紛争とアルゼンチンの立場(松下洋、南山大)
- 第30回 9月8日 杉江栄一著『軍縮—平和への選択』について(福田茂夫、名大)
- 第31回 10月6日 アラン・ウルフ著『現代アメリカ政治の軌跡』について(村松紘行、市邨学園高蔵高)
- 第32回 11月4日 中山治一教授の論文「『清仏葛藤一件』と日本の選択」(日本国際政治学会編『日本外交の思想』国際政治71号、1982年8月刊所収)の合評(義井博、名古屋市立大)
- 第33回 12月8日 Andrew M. Scott の The Dynamics of Interdependence (UNC press, 1982) の紹介(草間秀三郎、愛知県立大)
- 第34回 1983年1月19日 ベトナム和平パリ協定とニクソン外交(福田茂夫、名大)
- 第35回 2月16日 Johan Galtung 著「The True

Worlds」(1980)の紹介(村瀬亨、岐阜教育大附属高)

第36回 4月13日 バーンズ外交研究の動向(佐藤信一、静岡大)

第37回 5月11日 国有化の政治学—ベネズエラの事例(二村久則、名古屋聖霊短期大)

海外の学界動向

ISAに出席して

細 谷 千 博 (国際大学)

さる4月5日から9日までメキシコ・シティで開かれたアメリカ国際政治学会(ISA)には、ラテン・アメリカ各国からの参加者が多かったことはもとよりのこと、加えて西欧それに東側の国々からの参加者も増え、3年ぶりの出席であっただけに、学会じたい国際的性格を強めた点がとくに目を惹いた。理事会の席上、ISAの性格をめぐって、アメリカの学会なのか、北米の学会なのか、それとも世界的なものなのかという議論が行われたのもむべなるかなであった。来年の3月24-25の両日、ワシントンで各国の国際政治学会のWorld Congressを開くことが決ったが、それは1977年秋、日本国際政治学会が音頭をとって開いた3国(日米英)学会のシンポジウムが先鞭をつけた道を発展させるものであることが繰返し強調された。また1986年を国際平和年とする国連総会の昨秋の決議をうけて、ISA(そしてJAIR)がIPSA、およびIPRAとともに、国際平和年にむけて協力してほしい(たとえば平和学をめぐる国際シンポジウム)旨の要望が国連事務局側の人たちとの会合の席上行われた。

BISAに出席して

鴨 武 彦 (早稲田大学)

昨年10月から今年の3月にかけてロンドンに滞在中、私は英国国際政治学会(BISA)に出席する機会に恵まれた。その時の感想の一端を述べてみたいと思う。学会に出席することになったのは、チャタムハウス(英国王立国際問題研究所)のターナー氏が、同研究所の「エネルギー政策部会」で研究されていたオーストラリアの教授が一時帰国されることになったので、その部会にでている私にその教授のかわりに教授の論文についてスピーチするようにと依頼されたからである。幸いにも教授の論文は、私の新しい研究テーマとかかわりあいがあった。

学会は、昨年12月15日から17日までサウスハンプトン大学で開催された。軍港のある町である。学会は、15日夜のレセプションから始まり、およそ百名ほどのBISAの学者たちが中心に大学の寮に泊りがけとなった。その夜のかわきりには、フランケル教授の司会の下に、英国国際戦略研究所(IISS)の新所長ロバート・オニール教授の招待講演が行なわれた。オニール氏は、戦略研究がいかに国際政治の平和の研究に結びつきうるものか、その関連性を諄々と説いていた。英国でも戦略研究を専攻する国際政治学者がまだ少ないことが指摘されていて興味深かった。

夜のスタートというのは日本の学会にはあまりみかけない新形式であるが、それよりもほとんど皆が一箇所に泊りがけで朝昼晩食事をともにし、ゆっくり時間をかけて話しあうことは大変よいことのように思われた。今何を研究し、何を執筆しようとしているかなど、和気あいあいのなかにも大事な情報の交換がある。

翌日から学会の大会はいくつもの分科会にわかれて進行した。到底その動向などまとめることはできないが、フリードマン教授(ロンドン大キングズカレッジ)の'The Falklands War: Exception or Rule'と題する論文発表やLSEのドウィシヤ氏のレバノン後中東情勢のソ連分析などが出席者の間で話題を呼んでいた。「フォークランド戦争」については、時期的にその直後とあって、多くの人がフリードマン氏の分析に賛否両論をたたくわし、聞いていて思わず熱が入った。

私が発表させていただいた「エネルギー安全保障」分科会でも感じたことだが、学会では、国際政治の歴史動向分析を深くつきつめていくと同時に、外交政策論がふくらみをもって参加者の間で発展をみていた。やはり、分析と提唱、よきコンビネーションだと思ふ。多くの方々の励ましをいただいて私の報告も無事終った。その後色々な大学を訪れスピーチする機会をえた。人と人との接触、勉強の情報の交換の大事さを英国でも強く感じた次第である。

大学紹介

国際大学

宮里政玄

国際大学は、「国際関係研究と地域研究の学際的統合」と「高度の国際性をもつ研究者と専門的職業人の養成」を目的とする国際関係論の学科大学院として、昭和57年4月に設立された大学である。初年度は開学の準備等に費され、実際に講義が開始されたのは58年4月である。その間研究活動として中東問題ハーバード・セミナー、

南北円卓会議、シンポジウム「アジアの経営」、シンポジウム「アジア・太平洋地域における戦後国際政治と日本」が開催された。大学の所在地は、豪雪とスキーで知られる新潟県南魚沼郡大和町で、上越新幹線の浦佐駅から車で10分のところである。

教育は国際政治と国際経済、および4つの地域研究(日本、アメリカ、アジア、中東)の6つのプログラムから成っている。学生は1つのプログラムを主専攻とし、他の1つを副専攻として履修する。また、講義は原則として英語で行なわれることから、学生の英語能力が重視される。入学の条件としてTOEFL 550点が必要されるし、さらに開講前に約6週間の英語の集中特訓が行なわれる。

現在、学生の構成は企業派遣の委託学生(33)、一般学生(8)、外国人学生(2)、計43人であるが、9月に始まる第2学期には13人の外国人学生が加わることになっている。教員の陣容は、専任25、外国からの客員教授6、非常勤講師31、計62である。

国際大学は、学際的な教育、英語による講義、主専攻、副専攻制の採用、学生構成、全寮制、学生対教員の比率など、ユニークな面を多く備えている。さらに外国の大学との交流をはかる努力も積極的に進められている。博士課程や中近東、日米関係に関する研究所の設立も計画されている。しかし大学はまだ始まったばかりであり、そのユニークな特徴を活かしていくためには幾多の試行錯誤を経なければならぬであろう。

国際交流

大連雑感

太田勝洪(法政大学)

アカシアの大連に一昨年春から今年春まで約2年間滞在した。小生にとっては大連が中国で一番美しい街に思えるのだけれども、往時大連で暮らしたことのある再訪者のほとんどは街が汚れてきたなくなってしまうと嘆いておられた。行政区画でいえば、大連市は5区5県からなり昔の関東州にはほぼ等しい。昨年7月に久しぶりに行なわれた人口調査の結果によると、人口は全体で468万余、市中人口は旅順区を含めて138万弱、旅順区を除き昔の大連市にはほぼ相当する地域では118万余であった。1935年の大連市の人口は36万余であって、いま手元に資料がないから確かなことはいえないが、敗戦時まで増加していたとしても、現在は2倍から3倍の人口を抱えるに至っているといえよう。昔の日本人住宅に数所帯が同居しているのが普通で、市の西北地域を中心に団地建

設も進んでいるけれど、他の都市と同様住宅事情は深刻のようだった。大連は北京、上海について3番目に定住許可を得るのが難しいところだと聞いた。

大連といえば日露戦争以来というイメージがあって、いわば対中国侵略の始点だとみなされるところだ。それだけに行く前は大連での対日本人感情はどのようなであろうかといささか心配していた。着いて間もなくの頃、街の大衆食堂で食事していたら、いきなり大声で「キサーノ」と呼ばれて吃驚し、こりゃてっきりやられるかな、と思ったら、60才位の労働者風で、友好の意を示すためであった。大連は対日感情がいい。それはどうやら、1945年から55年までの10年間に及ぶソ連の存在の“おかげ”でもあるようだ。小生の接触した範囲ではソ連人についてのプラス評価を聞かなかつた。

大連では大連外国語学院で、国際関係論の初歩をゼミ形式でおこなった。そもそもセミナーという授業形式がはじめてということだった。一般に中国では先生が学生に教えるという、上から下への一方通行だけであって、学生相互の討論やその過程から学生の創造性を引き出すという事は行なわれないようだ。科学の伝統にもよるのであろうか、小学生のときから、勉強といえば暗記である。試験期になると、街頭や公園で教科書を暗唱する姿をよく見かけた。つまり模範となるお手本があって、その通り出来れば自分も安心、先生も安心という訳である。批判精神の入り込む余地はない。こういう環境のなかで、『法律セミナー』の'82年2月の増刊号などをテキストにして、相互討論を基本に批判的精神で、と指導したのだから、はじめは戸惑っていたようだった。しかし、もともと日常的な事柄では議論好きでもあることから、形式に慣れるとともに興味を持ちはじめ、なかなかぎやかなゼミになった。こうして平凡ではあるけれども、外国の立場を理解する必要性や多様な価値観の認識の必要性などが、学生から発言されるようになった。

上海へのラブ・コール

毛里和子(日本国際問題研究所)

- A「上海はやっぱりいいよ。日本は……」
B「何だい」 A「何ていうか…。人間をとことん追いつめるってかさ…。辛くてさ…。」 B「上海がそんなにいいかね…。え、ここにあるのはまがいもんだよ。まがいもんのフランス、まがいもんの人間、まがいもんのジャズ。ここじゃ中国だってまがいもんだ。」

斎藤謙「上海バンスキング」は1930年代の奇型都市上海と占領者日本人の挫折を鋭く描き出している。私がか

年3月まで1年半すごした上海は、街の通りもビルも、器は1930年代そのままである。1200万人がかもし出すまことに人間的な喧騒と独得のにおいも同じかも知れない。かつての大サッスーン財閥の拠点、いまの和平ホテル(外国人しか出入りできない)のバーで、5カ月来の当局の禁止が解けたジャズの生演奏を聞きながら、50年前の昔かと一瞬錯覚する程である。

だが一歩路地裏に入りこめば、又朝うすぐらい市場の行列にまきこまれれば、庶民の、健全でたくましいエネルギーと忍耐強さに圧倒される。あるいは上海図書館でかつての悪名高き競馬場跡を見下し乍ら中国人大学生と雑談すれば、彼ら新しい世代のクールさと現実主義に驚かされる。

1年半の間、現代史の資料集めやノドから手の出る程ほしい「内部資料」集めで節欲し、つとめて市内を歩きまわり、上海人とも日常のつき合いを求めたのは、器はかわらないけれど、中味が何かかわったにちがいない、その“何か”をみきわめ、せめてみきわめる方法や角度を感得したかったからである。

上海は「四人組」の拠点だった。そのせいか、いまここは「政治的去勢」状況にある。中央に忠誠を示すべく、上海は財政収入の九割を中央に貢納している。ここのインフラがどの都市よりも遅れているのを見て、「四人組」は“負”以外の何物も上海に残さなかったと怒り、他方で、中国政治において地方自治やら健全な地方主義が何故育たないのか、という問いに改めてぶつかる。

又、中国の公安の力と有能さに、ここの上から下への一元的政治体系がいかに集中的でまた有効であるか、と一種の感嘆を覚える。「外国人に対しては民族的誇りをもって接すべし」という通達は驚くべき速さで末端にまで伝わり、インフレにおびえる庶民は、「来年は値上げをしないから安心せよ」という党のおふれが下まで流れれば、ただちに落着きを取り戻す。

経済的多元主義の中で、中国社会は底辺で徐々に着実にかわりつつある。今後中国研究者に、中国の都市・農村にとどまって社会調査する機会が与えられるよう切に願っている。「伝統」への先入主とイデオロギー的思いこみの中国研究からぬけ出すためにも。

会員による新著(1982年11月まで、未完)

- 朝日新聞社編『平和戦略(1)』朝日新聞社、1982年4月
池井優『日本外交史概説・増補版』慶応通信、1982年6月
伊藤隆・塩崎弘明編『井川忠雄日米交渉史料』山川出版社、1982年6月
猪口孝『国際政治経済の構図—戦争と通商にみる覇権盛

- 衰の軌跡』有斐閣、1982年7月
- 浦野起央編著『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史 第三巻第四分冊-中東・4』パピルス出版、1981年12月
- 同『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史 第四巻(第三分冊a) アフリカ・3a』パピルス出版、1982年6月
- 同『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史 第四巻(第三分冊b) アフリカ・3b』パピルス出版、1982年7月
- 同『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史 第五巻第二分冊(a)-アジア・アフリカ(第三世界)2a』パピルス出版、1982年2月
- 同『資料体系アジア・アフリカ国際関係政治社会史 第五巻第二分冊(b)-アジア・アフリカ(第三世界)2b』パピルス出版、1982年8月
- 浦野起央ほか『国際政治・国際法の基本知識』北樹出版、1982年4月
- 浦野起央ほか『国際関係における地域主義-政治の論理・経済の論理』有信堂高文社、1982年8月
- 浦野起央『現代世界における中東・アフリカ-その国際関係とソ連の関与およびパレスチナ問題』晃洋書房、1982年11月
- ハッサン・ビン・タラル(浦野起央・岡倉徹志訳)『エルサレムの研究』毎日新聞社、1982年2月
- 衛藤滋吉編『現代中国政治の構造』日本国際問題研究所、1982年2月
- 衛藤滋吉ほか『国際関係論』東京大学出版会、1982年9月
- 太田勝洪ほか編『冷戦史資料選-東アジアを中心として』法政大学現代法研究所、1982年1月
- 小倉充夫『開発と発展の社会学』東京大学出版会、1982年6月
- 緒田原一・西川潤編『テキストブック世界経済』有斐閣、1982年11月
- 勝部元『怒りをこめて起ちあがれ-核のない世界をめざして』マルジュ社、1982年8月
- 鴨武彦『軍縮と平和への構想-国際政治学からの接近』日本評論社、1982年8月
- 川田侃『経済摩擦』東京書籍、1982年5月
- 川端正久『コミンテルンと日本-一九一九年三月-一九二二年一月』法律文化社、1982年5月
- 菊地昌典『絶望の選択中ソの和解-大破局必死の世界情勢の読み方』徳間書店、1982年10月
- 岸田純之助ほか『日本の安全保障』大阪書籍、1982年8月
- 木村明生『発達した社会主義の実像-ソビエト社会論』泰流社、1982年11月
- 木村汎『ソ連式交渉術-対ソ交渉のノウハウ』講談社、1982年4月
- 桑田悦・前原透共編著『日本の戦争-図解とデータ』原書房、1982年10月
- 斎藤孝『同時代を読む-国家と民衆』社会評論社、1982年8月
- 佐瀬昌盛・志水速雄編著『ソ連東欧1(1981-82)』原書房、1982年9月
- 佐藤栄一編『安全保障と国際政治』日本国際問題研究所、1982年3月
- 佐藤幸男編著『現代国際組織の諸相-国連専門機関の「政治化」と第3世界の態様』アジア経済研究所、1982年6月
- 佐藤幸男編著『現代の国際組織』人間の科学社、1982年7月
- 清水良三『国際法における伝統と革新・第2増補版』酒井書店、1982年10月
- 白鳥令『現代政治学の理論下』早稲田大学出版部、1982年5月
- 白鳥令編著『政治の経済学-民主主義はいくらかかるか』ダイヤモンド社、1982年5月
- 杉江栄一『軍縮-平和への選択』新日本出版社、1982年5月
- 鈴木佑司『東南アジアの危機の構造』勁草書房、1982年10月
- 高井三郎『ゴランの激戦-第四次中東戦争』原書房、1982年5月
- 高橋正雄『チトーと語る』恒文社、1982年2月
- ウォルフガング・レオンハルト(高橋正雄・渡辺文太郎訳)『ソ連にも革命が?』恒文社、1981年11月
- 高橋通敏『国際政治とヨーロッパ-西ドイツを中心として』弘生書林、1982年1月
- 土屋六郎『国際収支と変動相場制』有斐閣、1982年5月
- 寺谷弘一『ソ連の読み方-クレムリンでいま!?』グリーンアロー出版社、1982年11月
- 中川八洋『ソ連は日本を核攻撃する-対ソ防衛日本の戦略』日本工業新聞社、1982年10月
- 中川原徳仁・黒柳米司編著『現代の国際紛争』人間の科学社、1982年9月
- D・リースマン(永井陽之助訳)『20世紀と私』中央公論社、1982年11月
- 野村乙二朗『近代日本政治外交史の研究-日露戦争から第一次東方会議まで』刀水書房、1982年7月
- 花井等編著『地政学と外交政策』地球社、1982年6月
- 花井等『ニッポン新国富論-エコノポリティクスのすすめ』ダイヤモンド社、1982年10月

- 花井等編著『日米摩擦の研究－危機的構造をさぐる』
学陽書房、1982年11月
- 林建彦『近い国ほどゆがんで見える－日韓ギャップの源流』サイマル出版社、1982年8月
- 姫田光義ほか『中国現代史下』東京大学出版会、1982年7月
- 深津栄一『国際法秩序と経済制裁』北樹出版、1982年4月
- 細谷千博・本間長世編『日米関係史－摩擦と協調の一三〇年』有斐閣、1982年4月
- 細谷千博編『日英関係史1917－1949』東京大学出版会、1982年9月
- 毎日新聞社外信部『核時代は超えられるか－この狂気の実体』築地書館、1982年4月
- 毎日新聞社『日本の戦力 自衛隊の現況と三〇年の歩み』毎日新聞社、1982年8月
- 牟田口義郎『石油戦略と暗殺の政治学』新潮社、1982年6月
- 森田英之『対日占領政策の形成－アメリカ国務省一九四〇－四四』葦書房、1982年1月
- 沢田茂（森村俊夫編）『参謀次長沢田茂回想録』芙蓉書房、1982年8月
- 山口定『現代ヨーロッパ政治史上』福村出版、1982年4月
- 矢野暢『劇場国家日本－日本はシナリオをつくれるか』ティビーエス・ブリタニカ、1982年9月
- 山本武彦『経済制裁－深まる西側同盟の亀裂』日本経済新聞社、1982年9月
- 黒柳 米司（日本国際問題研究所）

事務局ニュース

編集後記

本号は、原稿が多く8頁で組みました。（文責・初瀬）

1983年7月10日 発行
日本国際政治学会
ニューズレター委員会
〒657 神戸市灘区六甲台町2
神戸大学法学部
木戸 蕪研究室内
発行人 川田 侃
編集人 木戸 蕪
印刷所 一（はじめ）印刷